

磐田市立郷土館報告 1

磐田市竹之内原古墳調査記録報告

磐田市教育委員会

1973

磐田市立郷土館報告 1

磐田市竹之内原古墳調査記録報告

磐田市教育委員会

1 9 7 3

## 図 説 明

図 1 竹之内原 1 号墳墳丘実測図	5
1 — 表土	
2 — 褐色混礫合砂土 (やや暗褐色)	
3 — 褐色合礫土 (やや有機質化)	
4 — 褐色混礫合砂土	
5 — ヶ (やや黄褐色)	
6 — ヶ (やや赤褐色)	
7 — 撥乱	
図 2 竹之内原 1 号墳第 1 主体部実測図	7
平面図 右 発見面	
左 床 面	
図 3 竹之内原 1 号墳第 4 主体部実測図	9
図 4 ヶ 第 2、第 3 主体部実測図	8
図 5 竹之内原 1 号墳出土遺物 (墳丘)	10
図 6 ヶ (壺棺)	12
図 7 ヶ (鉄器)	7
図 8 竹之内原 2 号墳墳丘断面図	19
1 — 表土	
2 — 褐色混礫土	
3 — 赤褐色混クサリ礫土	
4 — 黄褐色 ヶ	
5 — 灰褐色砂礫	
6 — 褐色混土砂礫	
図 9 竹之内原 2 号墳主体部実測図	20~21の間
図 10 竹之内原 2 号墳出土遺物	22
図 11 ヶ	23

図版 1 竹之内原 1 号墳

上 — 1 号墳遠景（2 号墳より）

中 — 第 1 主体部発見状態

下 — 第 1 主体部床面

図版 2 竹之内原 1 号墳

上 — 各主体部完掘状態

中・左 — 第 3 主体部壺棺

中・右 — 第 2 主体部壺棺

下・左 — 第 4 主体部壺棺

下・右 — 第 1 主体部甌出土状態

図版 3 竹之内原 2 号墳

上 — 主体部

下 — 遺物出土状態

図版 4 竹之内原 1 号、2 号墳出土遺物

1 — 1 号墳出土鉄器

2 ~ 6 — 2 号墳出土須恵器

# 磐田市竹之内原古墳調査記録報告

## はじめに

本書は、磐田市向笠竹之内原古墳2基の調査の記録を報告するものである。

昭和44年9月、磐田市向笠竹之内原字中原地内の古墳が所在する山林を、ブルドーザーにより工事をしているという連絡を受けた磐田市教育委員会は、現地に急行し、雨中で工事を確認すると同時に、現場の責任者立会いの下で古墳を確認し、応急の処置として古墳を破壊する恐れのある部分の工事を一時中止するよう要望し、了解を得た後、工事主体者である小長井長作氏と保存を前提として話し合いを開始した。しかし、この段階において、2号墳はブルドーザーによる伐根で墳丘の一部を削平され、3号墳、4号墳は石室の石材が露出し、古墳の位置すら十分に把握できない状態となっていた。

話し合いは、工事開始以後である点よりかなり難行し、静岡県教育委員会の指示もうけて、保存に努力したが、その間において、1号墳、2号墳は共に工事中止を了解された部分以上に工事が行なわれ、土柱状になってしまい、保存の可能性を少なくしてしまった。

小長井氏は、保存のために努力され、工事の計画変更等も行なったが、1号墳、2号墳は、保存不可能となり、3号墳、4号墳のみ保存することとなった。

結果的には、3号墳、4号墳は完全に破壊されており、その付近より新たに発見された古墳時代の住居址を保存することとなった。

しかし、この住居址は、位置の確認を行なったのみであるので、本書においては、1号墳、2号墳の調査記録のみ報告する。

なお、本調査においては、多くの研究者諸氏の参加協力を得たので名前を記して感謝の意を表したい。

・遠江考古学研究会会員

　芝田文雄氏 他

・国学院大学学生

近藤 澄、松沢 修

以上その他、小長井長作、鈴木芳太の両氏、寺沢峯子、吉沢節子の両君の協力を得た。最後に、資料の整理は、磐田市立郷土館で平野和男、柴田稔が行なったが、柳沢一男、松沢修、松本正規の三君の協力を得た。（柴田）



竹之内原付近位置図

#### 遺跡の立地

太田川は、多くの支流を小笠山塊の谷間や磐田原台地の北辺に有し、合流して太平洋に望む河川である。現在は、護岸工事により流路は安定しているが、以前は、流路を大々的に変更して、小笠山塊と磐田原との間を流れる河川であった。現在も、磐田原台地東縁の磐田市明ヶ島付近においては、三日月湖状の旧河川を残しており、散在

する冲積地内の集落の多くは太田川の自然堤防上にある。これ等の集落により、磐田原に比較的接近していたころの太田川の蛇行は現在でも知ることができる。そして、太田川の現在にまで至る歴史の中で、自然堤防を残すと共に、磐田原台地東縁の谷間に沢沼を残した。それ等の中で鶴ヶ池は現在も池として残り、再び湿地化している樋ヶ谷は著明なものである。松林山古墳を初めとする新貝厨戸地区にある前期、中期の古墳を考えるにおいて、重要な位置を占める鏡影遺跡を初めとする磐田原南縁の遺跡も、太田川、今之浦川、天竜川による作用によって可耕地化された部分である。

本遺跡は、太田川によって形成された冲積地との比高約60mの磐田原台地の支丘に存在するが、眼下に向笠新屋、竹之内の両部落があり、これに接して東側を小蔽川、敷地川が流れている。両部落は、太田川の自然堤防上に存するが、これと台地との間には約300mの水田がある。この水田の西側には最近まで湿地であった小さな谷がある。

この谷の入口付近の台地斜面の途中にあるせまい平坦地と、谷の奥端の台地上には弥生時代の遺跡が知られており、さらに今回の調査で谷の奥方向北側の台地にも古墳時代前期の集落があることが判明した。又、冲積地中の自然堤防にも遺跡があることを、水田から出土する弥生時代の土器で知ることができる。

以上の様に、当遺跡付近の台地縁と、自然堤防との間、あるいは、谷間は、弥生時代の可耕地として、使用されていたことがわかる。

このような背景を持った支丘の最高部に位置しているのが1号墳である。1号墳からは、遠く太平洋、森町、さらには牧之原台地を望むことができる。すなわち、太田川の冲積地はほぼ一望できる所であり、本墳から望める弥生時代の遺跡は、太田川流域の大半となっている。

2号墳は、1号墳の尾根との間に小さな谷を有して西側の小丘上にある。

(柴田)

## 竹之内原1号墳

本墳は、調査開始前に回りを削平され、比高6mから7mの土柱状になり、調査においてもきわめて危険な状態であったが、調査の進展と共に、重要な歴史的意義を持った遺跡であることが判明した。調査の記録を報告するにあたって、近年磐田市においては、頗る多くなったこのようないくつかの状態での調査は、人間としての権利すら剥奪されかねないものであることを明記する。

### 外部施設

外部施設には、地山を削り出した段がある。これは、尾根の頂部をカットすることによって、本墳が独立した高味を有している結果となった理由であるが、削り出しは、不整形で、円とか方形の定形的平面形ではない。強いて定形なものとしてあつかうとすれば、方形に近いものと考えることができるが、方形としてあつかうことには後述もするが疑問がある。規模は、外法で第1主体部主軸に直交する方向で9.3m、併行する方向で同じく9.3mを数え、高さは、0.3mから0.9mである。

削り出しは、一周連続するものではなく、墳丘北側と南側にそれぞれ削られていない部分がある。また、主軸の南方向の延長線付近に、幅1.7m、長さ2.2m、削り出しの段底面より高さ0.3mの造り出し状のものがある。

削り出しの段底面は、すべてテラス状になっていたか否かについては、墳丘周囲が削り取られてしまったため明確さを欠くが、少くとも、西側付近はテラス状になっている。しかし、墳丘北側は、後世の擾乱により十分知ることはできないが、一部に溝状となる部分があり、これが尾根の方向でもあることより、墳丘南側も同様な状態だったものかも知れない。そういう点では、茨城県須和間遺跡<sup>1</sup>で見るような状態を考えることが可能である。又、最近袋井市で発見された弥生時代後期の遺跡にも類例がある<sup>2</sup>。削り出しは、もっとも高い所で現存する墳丘の頂部よりは底面まで約1.7m、削り出しの始まる点より0.9mある。

この削り出しは、視覚的な立場よりすれば、確實に墳丘とすることができるが、本墳においては、同時に盛土について考える必要がある。

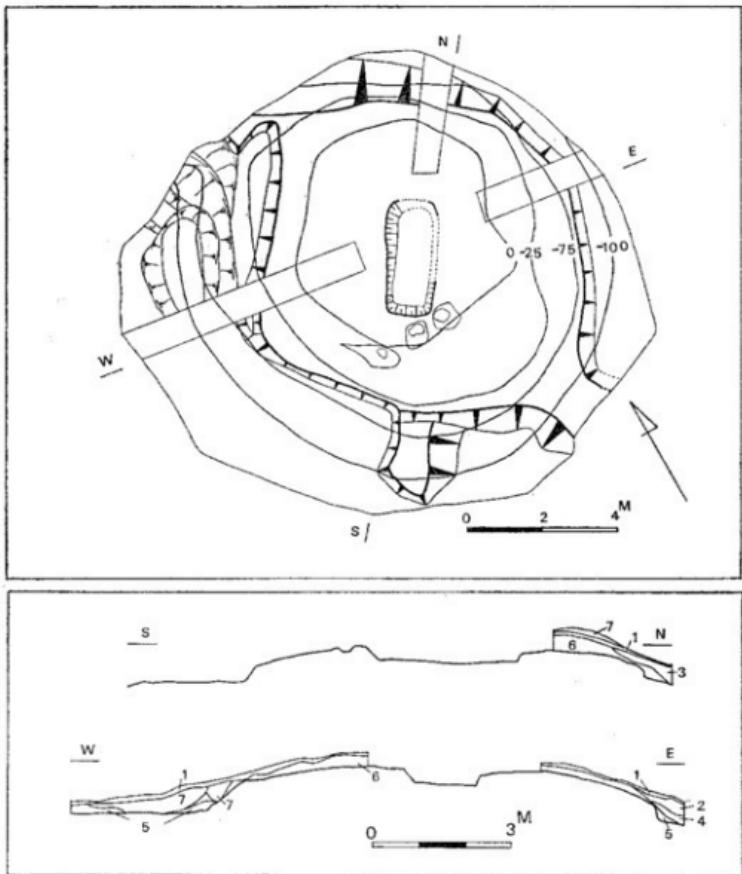


図1 平面図・断面図

盛土が確認できるものはないが、削り出し面全般に確認できる黄褐色の礫を多量に含む土層より上に褐色混礫合砂土（やや赤褐色）の層と表土とがある。これは、地山、あるいは旧表土の一部と考えることもできるが、第1主体部は、本層内に礫の一部が含まれて発見され、掘り方より若干はみ出している。このことは、礫槽が造られた時点では比較的不安定な状態にあったとも考えることができる。また、第2主体部の蓋はほとんど消失し、第3主体部は半分、第4主体部は蓋の半分以上が欠失してい

る点より各主体部を復元して、これを被覆するだけでも部分的差異はあっても20数cmが必要である。この土は、削り出しが完全に埋没していた状態よりこれがあったものと考えられる。この付近の状態よりすると、現状において黄褐色混疊土層より表土までの高さは十分過ぎるほどあり、特に褐色混疊含砂土層は他の部分よりかなり厚い状態にある。もちろん、この付近の地山の層位は、それほど厚くない状態でかなりの変化があるので、これをもって盛土を立証することは無理であるが、削り出しに堆積した土は、調査の範囲が不十分のため土量まで知ることはできないが、かなりの量となり、特に E-W 断面より観ると、これが墳丘より流出した土であることは明確であり、盛土と考えることが不可能なものではない。

## 内 部 主 体

主体部は、中央に礫桟があり、この南側から西側にかけて近接して3つの壇棺がある。

### <第1主体部> (図2)

墳丘の略々中央部に位置し、主軸は、北より約40° 東に傾斜している。この主軸の延長線よりやや東側に造り出しがあり、東西各辺に対してもほぼ併行に位置している。これは、尾根の稜線に対して直交することになる。

現存する部分よりの計測によると、幅約1.2m、長さ3.0m、深さ0.3mの範囲に平面形方形に地山を掘り込み、10cm前後の河原石を平坦に敷き、棺を安置した後に回りに礫をつめたことがうかがわれる。棺の前後は、左右よりやや広く礫をつめてあったと思われるが、後世の擾乱によって一方を欠いている。なお、礫桟の両外側は直線的であるが、短辺にあたる部分は若干弧線になっている。

礫桟発見面において、図2に見ることなく内側に礫の発見されないほぼ長方形になると思われる部分があり、この部分は、床面に至るまでほとんど礫が含まれない褐色土が発見された。

以上のように、1) 床面は平坦である。2) 内側の礫を含まない部分は長方形と思われる。3) 磚を含まない部分と、回りの磚の部分との境はほぼ垂直である。4) 床面の敷石は、掘り方全体に平坦に敷かれている。という現象を知ることができる。

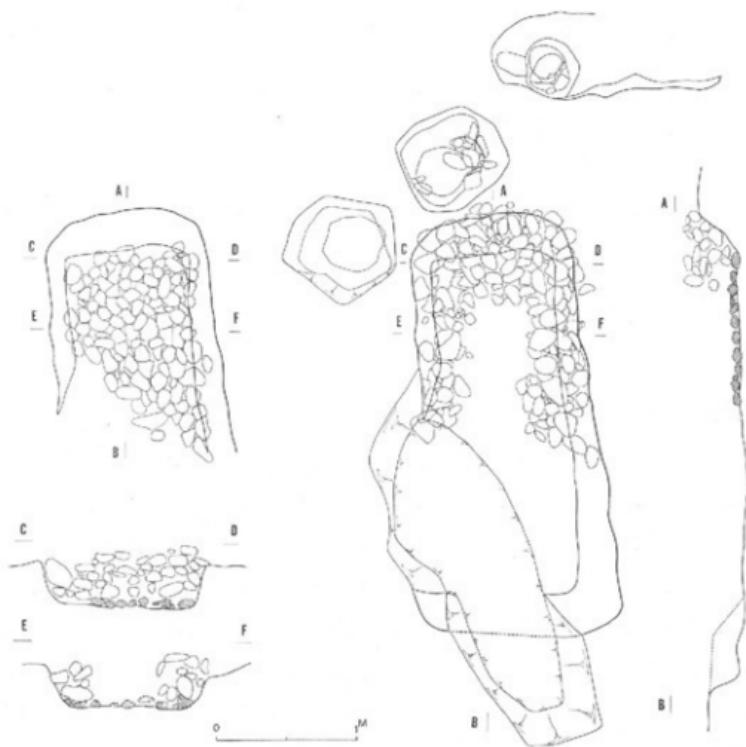


図 2 竹之内原 1 号墳主体部実測図  
穂柳平面図 右 発見面 左 床面

のことによって、長方形の掘り込みを造った後に、床面として敷石を行ない、幅 45cm 前後、長さ 200cm 前後の箱形木棺を安置し、回りに砾をつめた後に有機質物あるいは、大石による蓋をしたものと考えることができる。

#### <第2主体部> (図 4)

不整形な五角形の掘り込み内に、頭部以上を欠いた壺形土器 2 個をかぶせ蓋状に組み合せて、ほぼ水平に埋納したものと思われる。

現状では不整形な五角形の一辺は、40 から 50 cm あり、最大径は約 80 cm、深さは

約20cmある。

壺棺そのものは、全体の約3分の2を欠損し、特に蓋はわずかに残存している程度である。棺の下端は、掘り込みの底面より約10cm離れており、数個の河原石が棺を安定させるためにおかれている。

内部よりガラス小玉2個が発見された。

#### <第3主体部>(図4)

3つの壺棺の中央にあり、第1主体部の主軸の延長線に接している。1辺が約70cm、深さ約20cmの不整形な方形の掘り込み内に2個の壺形土器をかぶせ蓋状に組み合せて、口の分を若干高くして埋納している。

全体の半分を欠損しているが、棺は頸部まである。蓋は、頸部以上を完全に欠き、上肩部まである。棺は掘り込み床面より数cm離れており、第2主体部同様疊によって安定をはかっている。蓋は身に比較して、最大径が小さいことと、傾斜があることにより、掘り方の床面より10cm以上離れており、このため、蓋の下には多くの礫が使用され、底部の後にまでつめられている。しかし、それでも十分な安定をはかることはできなかったと考えるべきか、身と逆方向に傾斜している。

#### <第4主体部>(図3)

3つの壺棺の内最も西側に位置している。本主体部は、調査の進行上最後に発見され、削り出しの始まる部分に近いために、不覚にも一部を削平してしまった。

掘り方は、第2主体部、第3主体部とは異って、短軸約60cm、長軸約120cm以上の長楕円形になると思われる。

棺は、西よりの部分に短軸方行に埋納されているが、棺の部分がさらに掘り込まれており、深い部分で掘り方発見面より約30cmを数える。又、蓋のおかれている部分が身の置かれている部分より浅く造られている。墳丘の中でもっとも低位置にあるためであろうが、残存状態は最も良好で、身は掘り方発見面より下にあり、ほとんどが欠

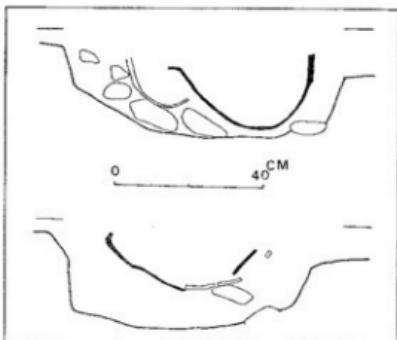


図4 竹之内原1号墳第2(下)・第3(上)主体部実測図

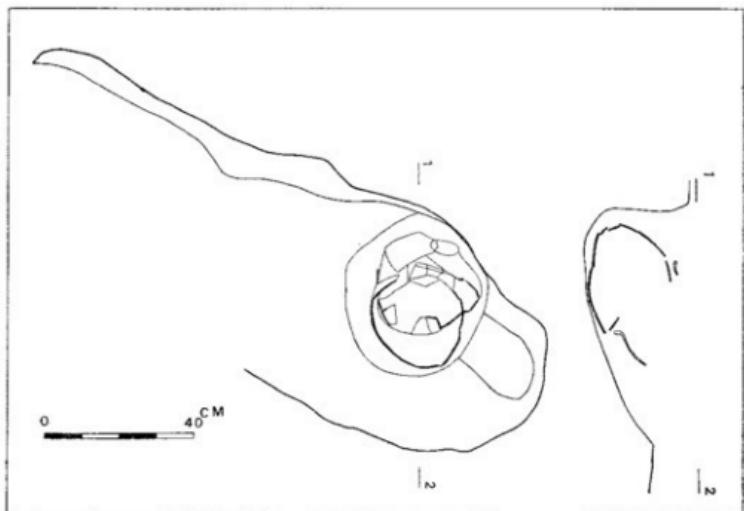


図 3 竹之内原 1 号墳第 4 主体部実測図

損していない。蓋は、甕形土器をかぶせ蓋状にしているが半分以上を欠損している。

棺は、上方向に傾斜を有し、3つの棺中最も傾斜している。

第2主体部、第3主体部において発見された砾の状態は発見されなかったが、これは、棺が掘り方の床に接している点、掘り込みが棺に合せてあるため等によるものと思う。

3つの壺棺の内、第2主体部と、第3主体部とは類似点が多いが、第4主体部は、掘り方のプラン、棺安置の方法、棺に使用された土器の器種、等かなり前二者とは異っており、又、微視的な土器の形態的観察より、3つの内で最も新しいと考えることもできる。

## 出土 遺 物

### <土 器> (図5、図6)

出土土器は、壺棺に使用されていた6個体の土器と、段状削り出し部分より発見された土器片である。

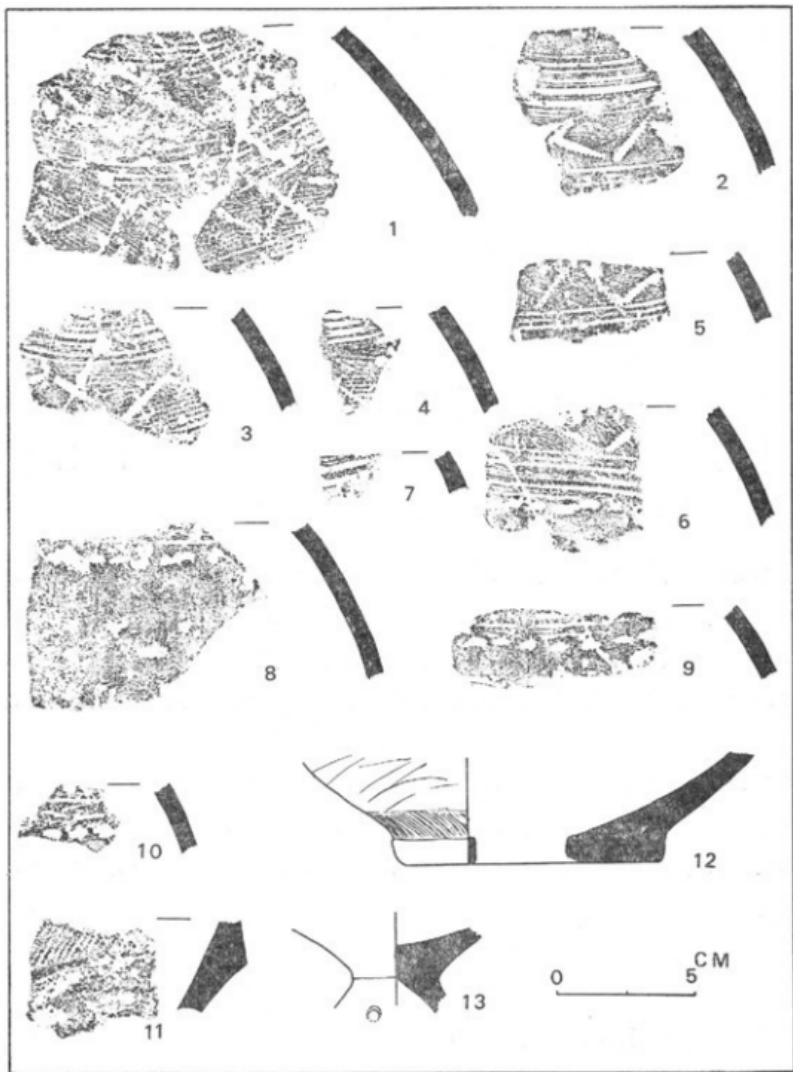


图 5 竹之内原 1 号墳埴丘部出土土器

### 1) 段状削り出し部分発見の土器 (図 5—1~13)

図 5—1~10 は、同一個体であろうが、段が不連続になる南側陸橋状部分西側のテラス状の部分より発見されたもので、底面より 10cm 前後離れて散乱していた。出土地点が、工事により削除された部分に近いことより調査前に消失したものも多いであろう。器壁は、淡赤褐色を呈し、壺棺に比較すると保存は良好である。櫛歯の数が 12 本の極めて粗雑な櫛状工具により、横線文帯を 3 段以上もうけ、この間に櫛状工具を押圧した鉛文を施し、文様帶下端に、櫛状工具の片方の端を深く斜に押圧した列点文を配している。

この種の文様構成は、尾張、三河地方の寄道式に見られるものである。当土器は、胎土、焼成、整形において若干遠江地方と異った感じを与えており、施工工具は遠江地方の菊川式に見られる粗雑な櫛描文と同種の工具である。

図 5—11 は、造り出し北側に発見されたものであるが、削り出し開始端に近い部分で、削り出しに比較的遅く堆積した土中より発見されているため、壺棺の一部と考えることも可能であったが、本土器を使用している壺棺は発見されなかった。

下胴部最大径部分の破片である。胎土には小礫を含み、焼成は比較的良好である。最大径より上は黒褐色、下は淡赤褐色を呈し、最大径部分直上まで縄文が施されている。

この種の土器は、遠江地方中部の弥生時代後期に一般的に見られるものである。

図 5—12 は、底部破片である。胎土には小礫を含み、焼成は良好である。褐色を呈し、底部直上までヘラ整形がなされている。底部は、直径約 4 cm の焼成後の穿孔が見られる。

図 5—12 は、高杯形土器の破片である。脚部には、小孔を有しているが、数は不明確である。一般に、この種の形態の土器は、当地方においては、弥生時代後期中葉以降のものと考えられる。

### 2) 壺棺に使用された土器 (図 6)

表面に露出していたために、保存状態がきわめて悪く、細片化していたものの復元図である。

図 6—1 は、第 3 主体部の身に使用されていたものであるが、内部に崩壊していた

もの以外は、器壁はすべて剥離している。最大径は胴下半部にあり、ややふくらみをもって頭部に至る。頭部には、丸味をもった断面三角形の降帯を有し、櫛状工具の歯を押圧したいわゆる擬似縄文が施文されている。

図6-2は、第3主体部の蓋に使用されていたもので、他の土器に比較し胎土に砂を多く含んでいる。最大径は胴下半部にあり、底部は、上底になっている。頭部の破片は発見されなかった。

図6-3は、第4主体部に使用されていた土器である。壺棺の中では、もっとも保存の良かったものである。最大径は、胴部下半にあり、ふくらみをもって頭部に至る。胴部最大径以上には、単斜方向の縄文が施文されている。頭部には、米粒状の浮文が施されていた痕跡が見られる。

図6-4は、第4主体部の蓋に使用されていたものである。器壁は完全に剥落して

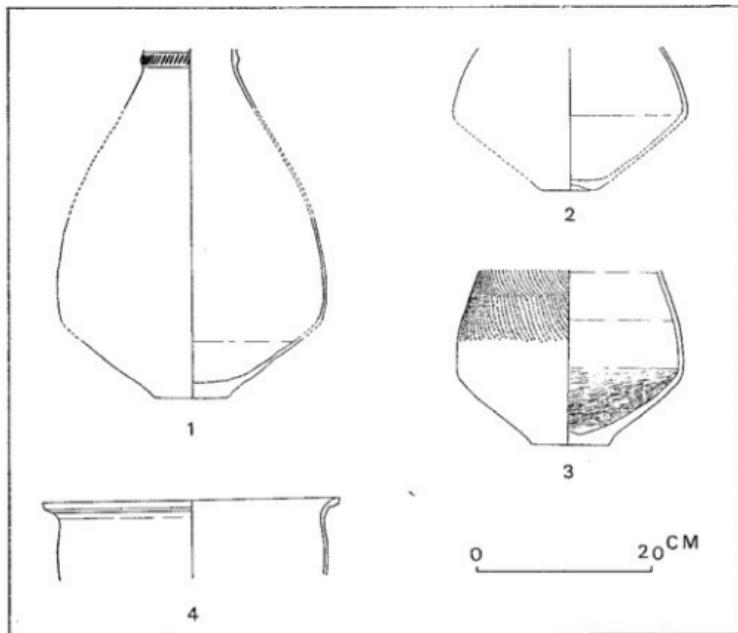


図 6 竹之内原1号墳出土土器概測図

いる。口縁部は、複合口縁となり、頸部より口縁部までは急角度に外反している。最大径は口縁部にあるが、変形土器としてあつかうべきものである。

### <装身具>

#### ガラス小玉

第2主体部の棺内より発見されたものである。径3.75mm、厚さ1.75mm、穴の径1.20mmのものと、径3.30mm、厚さ2.90mm、穴の径1.50mmの2個があり、どちらも青味がかかったコバルト色を呈している。

### <武具> (図7)

#### 鉄 剣 (図7-2)

第1主体部の擾乱部と、擾乱されていない部分との境に発見されたもので、茎側は擾乱内より発見されている。礫櫛内の床面よりやや離れて北側に剣先を西方にして置かれていたものと思われる。全長17.5cmの短剣である。身の長さは13.3cm、幅は2.9cmあるが、闇よりの部分で3.5cmと若干広くなる。厚さは0.7cmある。茎の長さは4.2cm、幅は2cm、厚さは0.4cmある。茎の端より0.5cmのところに目釘穴がある。銹化が進んでいるため歯は、はっきりしないが、身の中軸にある。闇は両闇であるが、左右で位置が0.5cm程異っている。

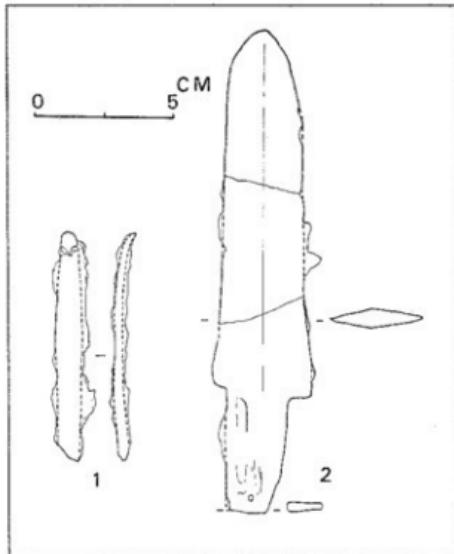


図7 竹之内原1号墳第1主体部出土遺物

### <工具>

#### 鏨 (図7-1)

第1主体部の櫛内北側西端の床面より出土したものである。穂先を除いてすべて木質が付着している。現存長は8.3cmあるが、全長9cm前後と思われる。幅は0.9cm、厚

さは背側で0.3cmである。

## 考 察

本墳の調査記録は、上述したが、本墳の調査において生じた問題点は多い。しかし、資料的な不足にも増して浅学のために、十分な考察を行なうことのできないことは残念である。ここにおいては、問題点を若干考えてみたい。

### 時期的考察

#### 〈土器において〉

出土した土器は、壺棺として使用されていたものと、削り出し部分より出土したものであるが、図5—1～10、図5—12、13以外は、遠江地方の特に中遠江地方より発見されるものである。この種の土器は、菊川式土器として総称されたものであるが、最近の資料の増加に伴って編年的に若干の変化を知ることができた。

袋井市徳光遺跡の莫大な資料を背景として掛川市天王山遺跡の住居址出土という良好な資料を考察した時に、弥生時代後期中葉における土器型式のセットはかなり明確に把握できた。さらに、浜松市安養寺遺跡、伊場遺跡出土土器等により、いわゆる有段羽状文を有する壺形土器とそれに伴う一連の土器を把握し、又二之宮半僧坊貝塚出土土器を主体とした一連の土器を知ることができた。

これによって（二之宮式）<sup>11</sup>（菊川I式）<sup>12</sup>（菊川II式）<sup>13</sup>の三つの型式に分類することを可能にした。

本墳出土の土器は、前記した中遠地方のものでない土器は除外して、上底気味の底部を有する。頸部に断面三角の縫帶を有する。最大径以上に単斜方向の縄文を有する。最大径が脛下半にあり、ややふくれ気味の肩部を有する等の特徴より、二之宮半僧坊貝塚出土土器と類似したものとすることができる。この種の土器の報告は、掛川市曾我領遺跡、袋井市徳光遺跡、浜松市伊場遺跡、細江町岡ノ平遺跡、等が知られているが、分布範囲は十分に把握しているとはいえない。ここにおいては（二之宮式）土器の時期に比定されるものと考える。

## 構築上の考察

### ＜外部構造において＞

外部構造の上では、不整形な割り出しを有する点と、盛土の有無の点があげられる。前者は、尾根の高部の回りを削ることによって尾根の上にさらにきわだったものができあがる結果を導き、意図の云々にかかわらず墳丘ができあがったことになる。この種の形態のものとして、櫻原郡倉見原遺跡<sup>注15</sup> 袋井市地蔵ヶ谷遺跡等を知ることができる。溝を有さない部分がある点については、地蔵ヶ谷遺跡を知ることができる。

盛土の有無については、方形周溝墓においても論議され、「若干の盛土はあったであろう。」とされつつある。本墳においても、盛土はあったであろうとすることができる点については前記しているが、ここにおいて盛土があったとすると、削り出し、盛土という2つの外部施設における特徴を考えることとなる。これに不整形プランという点を加えることによって、方形周溝墓と異った外部施設を考えることを可能にできるものと思う。

### ＜内部主体において＞

砾桿は、外部施設において記した倉見原遺跡に見ることができるが、かなりの相異はある。地蔵ヶ谷遺跡においても類似したものを見ることができる。しかし、砾桿がこの種の墳墓に対していかなる立場にあるものかについては十分に考察を進めることは困難である。後述するこの種の墳墓の主体部としては、砾桿が不偏性を有するとも考えることができる。

壺棺は、袋井市鶴松遺跡、同見取中遺跡、同地蔵ヶ谷遺跡、磐田市馬坂遺跡、浜北市芝本第Ⅱ遺跡<sup>注16</sup>、その他に知られ、遠江地方にあってはかなりの量とも思われる。これ等の内で、馬坂遺跡、芝本第Ⅲ遺跡は方形周溝墓より発見されたものであり、地蔵ヶ谷遺跡は本墳と類似したものであり、見取中遺跡は、地形的に本墳に類似している。方形周溝墓より壺棺の出土する例は多くはないが、限定された地域においては、この種の墳墓内より発見されている。本墳を含む、当地方における壺棺のあり方は、一つの地域性を考えることも可能であろうが、壺棺と方形周溝墓、あるいはこの種の墳墓との関連において地域性と同時に特殊性を考えることも可能と思われる。

## まとめ

以上において、若干の問題点、類例の指摘を行ったが、総合的に考えた時、本墳が方形周溝墓と呼ばれている墳墓と様相を異にしていることを知ることができる。特にこの異った様相を呈する本墳が、同じ磐田原台地上の西側にある馬坂遺跡の方形周溝墓が造られている時期内にあることに大きな問題点を指摘しなくてはならない。すなわち、いずれの遺跡も十分な調査がなされているとは言えない点で、十分な検討もできないが、この二者の相異（換言すれば、弥生時代後期初頭に出現を確認した墳墓として、その最も対比されるべき方形周溝墓との現象の上に表われた相異）の本質を検討しなくてはならないという点である。

当地方では、少くとも後期中葉の時期までは方形周溝墓が造られていたことは確認できるが、その方形周溝墓の造られている時期に出現した本墳を、その相異を単に立地上の相異として結論することが可能であろうか。

立地の点よりすれば、地形に左右されて本墳のような形態が方形周溝墓内に出現することは可能であろうが、当位置にも方形周溝墓としての本墳を築造しなくてはならない必然性は、付近の地形と、時期的内容よりすればなかったとすることができる。また、当位置に選地する必要性があったと仮定した場合、不整形な平面形となったことを立地的条件と考えることも適当でないであろうことは、方形周溝墓そのものが、かならずしも方形の区割ではなく、「コ字形」のものが多く、<sup>註</sup>王山長泉寺山遺跡のごとく、地形によって低い部分からは溝が発見されない例によっても明確なことである。

等々の理由で本墳は、外部構造の上の方形周溝墓との差異は、立地条件により現出したものでないことを考えたい。

しかし、本墳が当位置にあることは確実なことであり、方形周溝墓としてではない本墳の築造にあたり、当位置を選地したことは考えなくてはならない。

地形的特徴として、尾根の内で特に突出して最も高位置にあること、太田川の沖積地が一望できる位置にあること（逆に台地よりすれば台地の先端にある）が考えられる。これは、立地上の特徴であると言える。先に、方形周溝墓としては、当位置を選地する必要性のないことを記したが、逆に、方形周溝墓としてではない本墳には、当

位置を選地する必要性があったとすれば、立地上の特徴は、選地の上での必要条件となるわけである。そして、この必要条件は、当地方の古式の古墳を含む古墳のものときわめて類似しているとも言える。

この立地における問題において、二者が考えられたことについては、本墳がある意味で形態的なもののみでなく方形周溝墓とは異ったものであることを考えさせるものであるとすることができる。

この他に、主体部が砾層を有する点（このことについては、資料的検討においてさるに実証できるものと考えている）、現状での視的な面で砾層と三つの壺棺に整然とした配置関係が見られる点（砾層に重複することなく、砾層に対して一定の方向部分にのみあり、掘り方内にあっては、より砾層に近い部分にある）、外部構造においては、平面形は不整形であるが、主体部の主軸の方向に造り出しを有する点等においても方形周溝墓との差異を知ることができるが、前記もしたように、この方形周溝墓との差異が、立地条件においての面も含めて方形周溝墓とは異った墳墓である点は、単に立地条件等の築造における段階での現場での問題として現出する差異でないことを指摘したい。

偶発的な調査であった本墳においては、検討も不十分であるが、この差異については、方形周溝墓のあり方として現状で把握できるものより推察すると、方形周溝墓築造の単位は、権現山遺跡に見るごとく、数軒の住居址と一つの方形周溝墓をそのテピカルなものとすることができよう。そして、一般的には、集落のあり方としての相異によるものであろうが、朝光寺原遺跡、宇津木遺跡<sup>112</sup>のような現象として見ることができよう。特に宇津木遺跡と、権現山遺跡の相互を関連して考察したときに集落と方形周溝墓のあり方を決定的とすると考えることも可能である。したがって、宇津木遺跡においても一個の方形周溝墓を選出すれば、権現山遺跡と同様数個の住居址を選出できると考えている。

遠江地方においては、集落の調査は多くなされていないこともあって、この種のことを考える資料に恵まれていないが、方形周溝墓と集落のあり方については、同様に考えてよいであろう。

これに対して、本墳は、権現山遺跡の様な集落では造られない形態のものであり、

宇津木遺跡において例を取るのも不適格であるが、集落全体のあるいはこれに他の幾つかの集落を含めたものが造る形態のものと考えることとしたい。換言すれば、太田川流域及び磐田原台地上の数個の集落と関係ある墳墓として本墳を考えることとしたい。最近調査された地蔵ヶ谷遺跡と、同様に考えることも可能と思う。

このことに関しては、筆者自身にあって多くの疑問点を内在していることであり、今後倉見原遺跡を初めとして、「方形台状の墳墓」<sup>注26</sup>等の検討と含めて確信のある結論を求めたい。

、この他にも本墳の提起する問題点は多く、まったく触れない部分もあることは残念であるが、その一部には、本墳の周辺をさらに調査することによって解決するものも含まれているであろう。（柴田）

- 注 1 茨城考古学会「茨城県那珂郡東海村須和間埋藏文化財緊急調査報告書」 S43
- 2 遠江考古学研究会が調査に協力したものである。「地蔵ヶ谷遺跡」と仮称する。 S46
- 3 「瓜野」瓜野遺跡調査会 S384
- 4 久永春男「日本考古学講座4」 S40
- 5 注4と同じ
- 6 大谷純仁他「東名高速道路に伴う埋蔵文化財調査報告書」 S43
- 7 向坂耕二他「掛川市天王山遺跡調査報告書」掛川市教育委員会 S43
- 8 平野和男、向坂耕二、「安養寺遺跡について」『長上郷土資料(二)』 S34
- 9 横口清之他「伊藤遺跡」浜松市教育委員会 S28
- 10 磐田市立郷土館保管
- 11、12、13 仮称
- 14 堀口清之「静岡県小笠郡曾我村領家遺跡亦生式土器」史前学雑誌2、3、4 S55
- 15 山村宏「東名高速道路関係遺跡調査報告書」 S43
- 16 井上裕之、大塚初重「方形周溝墓の研究」駿台史学第24号 S44
- 17 大谷純仁氏御教授、法多山尊永寺保管
- 18 川井正一氏御教授 袋井市立図書館郷土資料室保管
- 19 磐田市教育委員会調査 磐田市立郷土館保管
- 20 下津谷達男氏調査 大谷純仁氏御教授 静岡県立浜名高校保管
- 21 調査中のため不明確
- 22 斎藤優他「福井県鯖江市王山・長泉寺山古墳群」福井県教育委員会
- 23 横川好宮「北高師郡庄和村椎見山遺跡」台地研究13 S38
- 24 横浜市文化財報告昭和42年度
- 25 国学院大学考古学会「方形周溝墓の研究」若木考古83 S41
- 26 近藤義郎「古墳発生をめぐる諸問題」日本の考古学V S41

## 竹之内原2号墳(竹之内原4号墳)

本墳も、1号墳同様土柱状になってしまい、さらに主体部の方向は、風の方向に開口する石室で、風のはいりやすい様に考えて造ったかの様によく風がはいり、サラサラと落ちる砂を頭から冠っての作業は、いかに仕事とは言え二度としたくないと思うに十分であった。しかし、これも文化財を護る立場にある職員の怠慢の所以と思えば自業自得であろう。

### 外部施設

調査前に墳丘裾はすべて削除されてしまい、周辺等の墳丘裾部の状態は不明確なものとなつた。

残存していた墳丘より推察すると、略々15m前後の径を有し、高さ1.6m程度の円墳と思われる。

主体部が、完全に地山下に築造され、墳頂部付近に奥壁を持つ点において磐田原の古墳中では異例的なものであることより、盛土の状態も注目すべきであるが、保存状

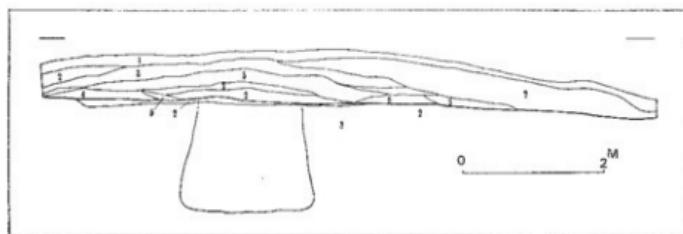


図8 竹之内原2号墳墳丘断面図

態が不良のため十分な観察はできなかつた。図8に示されるように、盛土は、石室が構築された後に石室の上から積み始め、常に石室上部が高くなっているように積まれ、古墳の規模より小さな、多分石室が被覆される程度の土盛りをした後に回りを積み、最終的な墳丘を造りあげている。

葺石、埴輪等は発見されなかつた。

## 内 部 主 体

内部主体は、横穴式石室である。遠江地方の横穴式石室は多少の差異はあるが、地山を掘り込んだ掘り方の中に構築されている。本墳の石室もその例外ではない。調査途中に雨によって崩壊した奥壁よりの天井石（石室縦断図の奥壁最上部の石の上に天井石があった。）も含めて完全に地表より下に構築されている点は、現在までに発見されている最も深い掘り込みである。

掘り方は、玄室奥壁よりでは上端の径約1.5m、下端の径約1.65mあり袋状の断面を呈しているが、玄室の中央部付近では上端の径約1.9m、下端の径約1.7mと上端の径の方が長い。しかし、下端より約0.2m上った部分で外側に張り出し径が約2.0mとなり、下端より約1.3m上った部分で若干内側に張り出して最も径が短くなり約1.9mとなる。したがって、奥壁よりの部分と同様袋状の断面となる。この様に掘り方が袋状になる例は、現在までのところ遠江地方では知られていないが、本墳の掘り方が石室を完全に内包する形態であることより特に顕著に知ることができたものと思う。袋状になる現象そのものは、掘り込みを構築する段階において、石室を「もちおくり」して構築することを計画していたためのものと考えられる。

石室は、この掘り方の内に造られている。基礎石は、長辺を石室の方行として立てて並べ、奥壁より3個は両側壁と共に角礫を使用し、石室の最大幅は、角礫を並べ終った部分にある。これより狭道側は円礫を使用している。基礎石より上は、長径20cmから40cm程度の円礫を主として小口積みとなっているが、長径5cm前後の礫もかなりの量使用している。この中礫の一部は、側壁を積んだ後に目詰したものであるが、側壁を積み上げる過程において使用されたものも多い。しかし、これは、特に規則性ではなく、主として使用されている礫の大きさに差が大きく、礫のかさなりが十分でない部分が多く、この部分に使用されたものと思う。

奥壁は、2枚の扁平石を並べ、それより上は側壁と同様な方法で積み上げている。

天井石は、細長の扁平石を用いている。天井の幅は、「もちおくり」により30cm程度である。

床面は、長径20cm程度の礫を最大のものとし、10cm程度の礫を主とした敷石がな

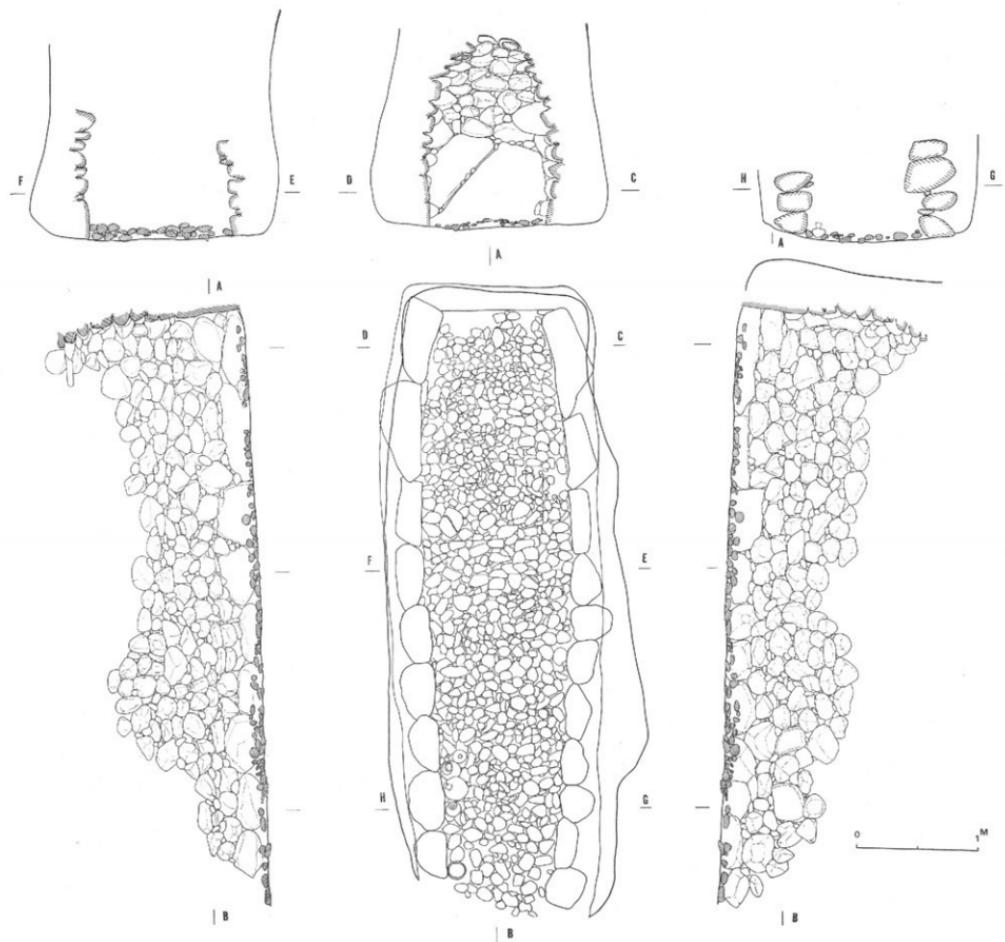


圖 9 竹之內原 2 号 填石室測量圖

されている。残存していた部分は、約5mあり、奥壁部での幅約80cm、奥壁より約2m狭道よりの部分での幅が最大となり約120cmある。敷石の状態は、中央部より奥の右側付近、中央部付近ではかなり整然としているが、全体的に雑然と敷かれている。

本石室は、一部破壊されてしまったため、全容を知ることはできなかったが、敷石が全体にあること、玄門と考えられる部分がないこと、後述する遺物の出土状態等より残存していた部分は、すべて玄室と考える。しかし、床面における平面形よりすると、奥壁部で幅が約80cm、残存している部分の最も狭道よりの部分で約80cmである点、副葬品の須恵器の出土した部分が残存している石室の先端付近である点等、玄門よりわずかに玄室にはいる部分まで残存していたと考えることができる。

石室の構築の順序は、側壁を全部取り除いて検討したが、①、奥壁を置く。②、奥壁よりの基礎石から狭道に向って置く。③、両側壁を積み上げる。のように考えることができる。今回は、玄門、狭道等が消失していたために、その部分が明確でないが、①と②との間にこれが行なわれたことを考えれば、基礎石の最後におかれた部分は、玄門に接する部分と考えができる。

## 出 土 遺 物

### 土 器

＜須恵器＞（図10—1～5）

蓋坏身、無蓋高坏、広口短頸壷、平瓶、提瓶、の他に敷石内より細片化した須恵器が若干採集された。全体に胎土焼成は良く、黒身がかかった灰色を呈している。計測置

表 I 須 恵 器 計 測 置 ( ) 内現存長 単位 cm

番号	名 称	口 径	最大径	器 高	色 調	胎 土	焼 成
1	坏 身	11.7	13.7	3.6	灰 白	普	良
2	広口短頸壷	9.4	12.8	8.2	灰	タ	タ
3	平 瓶	6.8	8.6	8.4	タ	タ	タ
4	提 瓶	(6.8)	13.9	(23.0)	タ	タ	タ
5	高 坏	16.3	16.3	13.3	灰 黒	タ	良 好

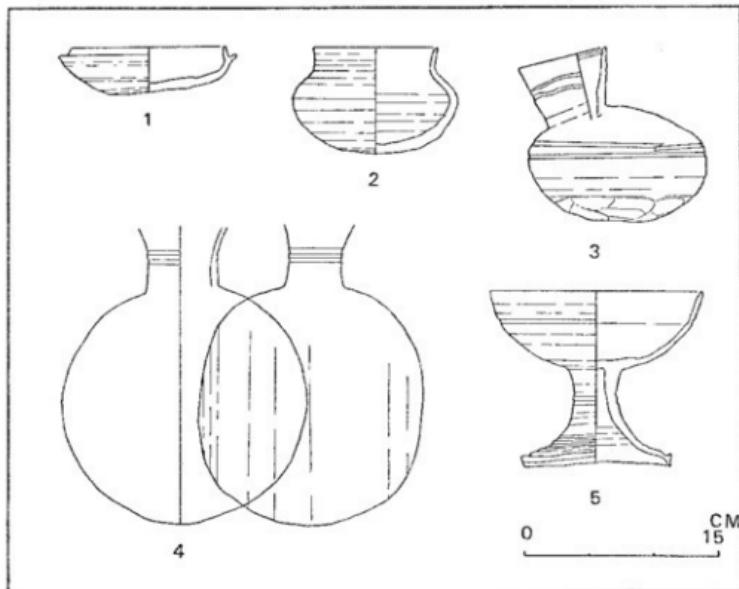


図 10 竹之内原 2 号 墓出土遺物

は表 I に示したとおりであるが、一括して第Ⅲ型式中葉のものと考える。

### 武 具

#### 〈鉄 鐗〉 (図11—1~8)

穂先の形態より 3 類に別けることができる。

#### A 類 (図11—3~5、7、8)

最も多く発見されたもので、いわゆる「のみ矢」<sup>羽矢</sup>形のものである。計測値は表 II に示した通りである。

#### B 類 (図11—6)

A 類と同様に「のみ矢」形をしたものであるが、穂の下半がこけているもので、一見銅鏡の形態を感じさせる。一例だけ発見された。

#### C 類 (図11—1、2)

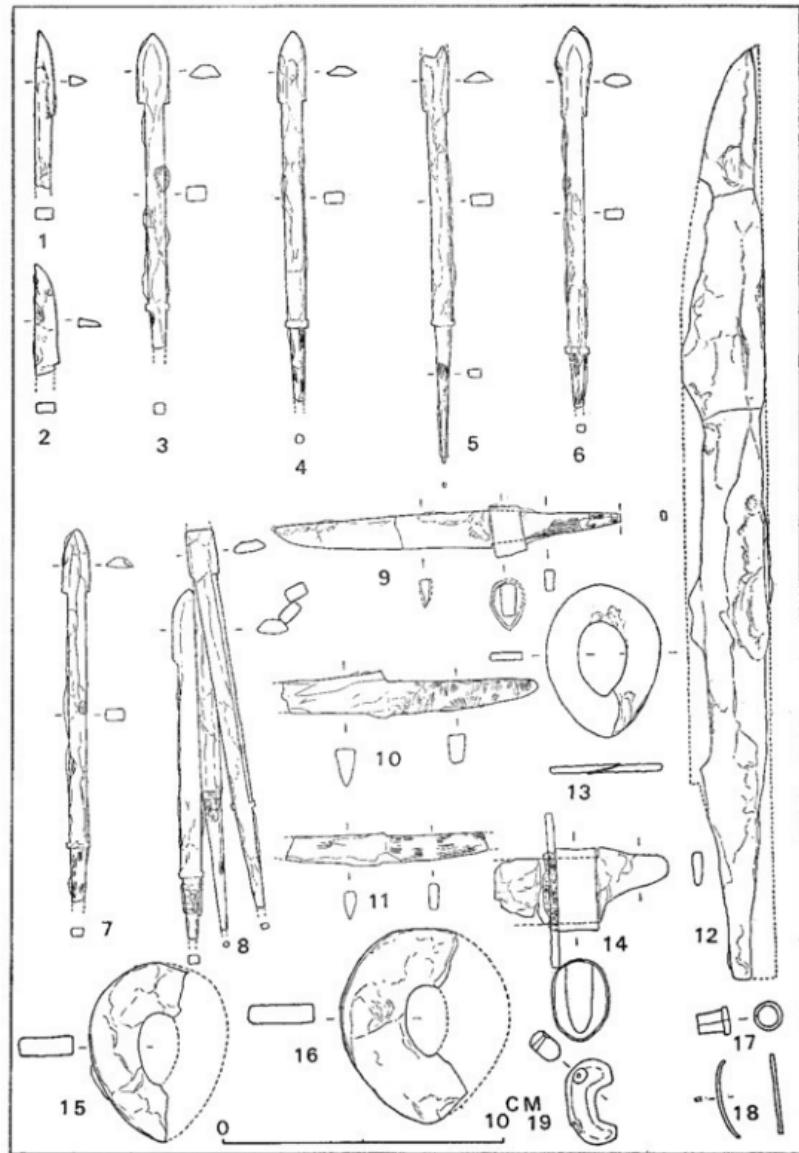


图 11 竹之内原 2 号墳出土遺物

表Ⅱ 鉄 鎌 計 測 置 ( ) 内現存長 単位 cm

番号	全長	總 先			範 被			備 考
		長	幅	厚	長	幅	厚	
1	(5.6)	3.0	0.7	0.4	(2.6)	0.6	0.4	A類
2	(4.0)	3.6	0.8	0.3	(0.4)	0.7	0.4	タ
3	(11.3)	2.5	1.1	0.5	(8.8)	0.7	0.5	C類
4	(13.2)	2.5	1.1	0.4	(10.7)	0.7	0.4	タ
5	(14.9)	(2.4)	1.0	0.4	(12.5)	0.8	0.4	タ
6	(13.6)	3.2	1.3	0.4	(10.4)	0.7	0.4	B類
7	(13.3)	2.3	1.0	0.4	(11.1)	0.7	0.4	C類
8	(12.6)	2.6	1.1	0.5	(10.0)	0.7	0.5	タ
	(12.9)				(12.9)	0.7	0.5	タ
	(14.2)	1.9	1.1	0.4	(12.3)	0.8	0.5	タ

いわゆる「片刃矢」形のもので、発見例はA類に次いで多いが、保存状態は最も悪く茎以下は欠損して全体を知りうるものはない。

### <刀> (図11—12~18)

鉄鎌よりさらに保存状態は悪く、側壁に密着していた小刀身と、柄の鈔の部分が残存していた他は、散乱して発見された中より刀に関するものを選出する程度になっていた。

#### 小刀身 (図11—12~14、17、18)

##### ① 図 11—12

全長約33.5cm、身の長さ約26.5cm、茎の長さ約7cm、身の幅は約3cmあり、関は刀関となるものと思われる。木質部の付着もなく、金具の痕跡もない。

##### ② 図 11—13、14、17、18

同一の刀の残存部と思われる。18は鈔の止め金具であろう。17は、同一のものが2個体あり、柄間の頭よりの部分に穿った孔にはめられたものであろう。13は卵形の鈔であるが、14の様な状態で発見された。14は、刀身に鈔と柄の責金具様のものが付いた状態のもので、鈔は、身の部分にとりつけられた種のものと思われる。すべて地金は青銅の金銅製であり、儀仗用のものと思われる。

#### 鈔 (図11—15、16)

いずれも鉄製の鍔で、保存は悪いが透しのない卵形のものである。13の金銅製の鍔に比較して、15は6.5cm、16は7.5cmと大きいが、孔は、13が3.7cm、15は2.6cm、16は2.5cmと小さい。このことは、14において鍔が身の部分にあることによるものであろう。

#### <刀子> (図11-9~11)

関の形態より2類に分けることができる。

##### A類 (図11-9)

刀関のもので1例ある。茎の部分には木質が付着している。柄は、関の部分までと思われる。鞘の痕跡は発見されない。身の長さ7.9cm、茎の長さ4.6cm、総長12.5cmである。

##### B類 (図11-10、11)

両関のもので2例ある。いずれも破片のため十分知ることはできないが、10は樹皮痕状のものが見られる。

#### 装身具

#### <勾玉>

メノー製のものが一個発見された。穿孔は一方より行なわれ、貫通した後に他方より細い孔を広めるための穿孔が行なわれている。

## ま　と　め

本墳は、竹之内原群中の一つであり、谷を一つ隔てて存在する5世紀末から6世紀中葉にかけての新屋原群に続く時期のものと考えることができる。

本墳の調査で新たに発見された点として、奥壁が墳頂部下にある。石室掘り方が袋状である。石室の奥壁よりの部分は、完全に地表下にある。等を考えることができ。これ等は磐田原古墳群中の資料としては新資料であるが、今後、磐田原古墳群の再検討<sup>28</sup>も必要と思われる所以、これ等の考察の一助となれば幸いである。(平野)

注1 向坂第二、川江秀孝、「浜松市半田山古墳群調査記録」浜松市教育委員会

2 遠江考古学研究会、「大沢、川尻古墳跡調査報告書」遠江考古学研究会

- 3 後藤守一「原始時代の武器と武装」考古学講座 雄山閣
- 4 3と同じ
- 5 3と同じ
- 6 平野和男、向坂綱二「後期古墳特集—遠江地方」古代学研究30
- 7 静岡県教育委員会により埋蔵文化財分布調査が行なわれている。

## 結　　び

当報告で扱った4基は、調査前まで特に定まった名称のないものであったが、調査の都合上、竹之内原1号墳から4号墳としたものである。報告にあたってもこの名称を用いたが、現在磐田原古墳群の分布調査を行っているため、これに伴ってさらに適当な名称の必要になることが考えられる。このため当報告の名称は仮称とし、今後名称の変更のある可能性があることを付記する。

図版1 竹之内原1号墳



1号墳 遠景（2号墳より）

第一主体部発見状態



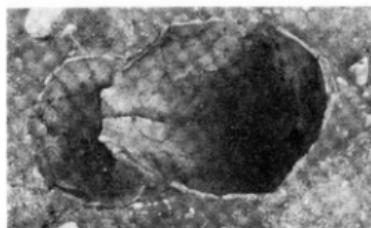
第一主体部床面



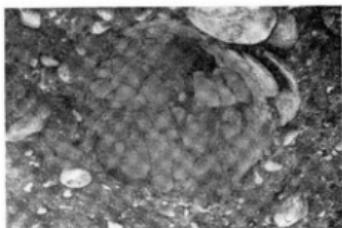
図版2 竹之内原1号墳



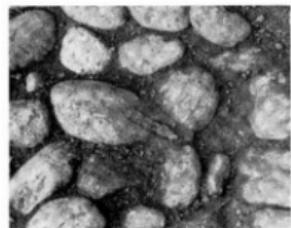
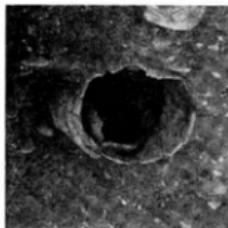
1号墳各主体部完掘状態（手前が第2主体部）



第3主体部壺棺



第2主体部壺棺



左 第4主体部壺棺

右 第1主体部鉢出土状態

图版3 竹之内原2号墳

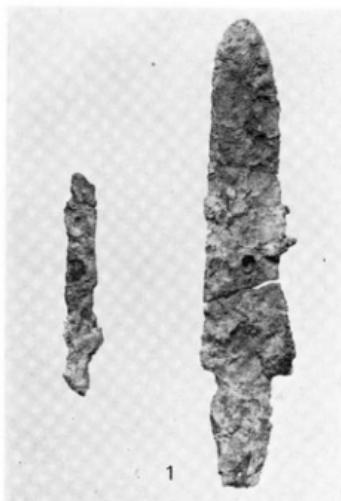


竹之内原2号墳主体部



竹之内原2号墳遺物出土状態

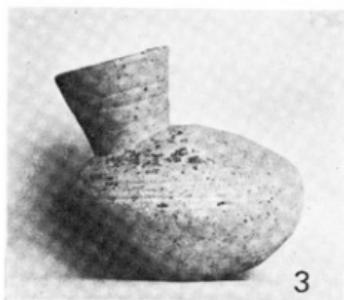
図版4 竹之内原古墳出土遺物



1



2



3



5



4



6

1 1号墳第1主体部出土鉄器  
2～6 2号墳出土須恵器

昭和48年3月31日発行

磐田市竹之内原  
古墳調査記録報告

編集 磐田市立郷土館  
発行 磐田市教育委員会  
印刷 株式会社 山田印刷所

